

## レゾナンスの定義

第九回

## 快適と対す

文学上では「居心地」という言葉が大別すると三つの対象に分けられる。すなわち物的世界、人間関係、そして言葉である、と述べた。

国木田独歩の「疲労」では宿屋が登場して、居心地がいいという話題がでていた。

便宜上、種類分けをするために、物的世界として取り扱ったのだが、実は、居心地のいい宿屋というのは、単に物的なものが居心地いいばかりではなく、そこに働く人のもてなしであるとか、周りの地域の雰囲気であるとか、

空気、匂い、感じられるすべても含めて感じられるものにちがいない。

人間関係もあるし、直接みえない、その宿屋を成り立たせているシステムや、制度なども関連しているかもしれない。

また大人の場合には、感じられるものが言葉を仲立ちにしていることも多々ある。たとえば、このごろ建築家が快さをめざして、自然木・和紙・竹・麻などの自然素材を意識的に内部に張るのがみられる。

それらの自然素材は、なんらの言葉

さではないかという声が当然のように上がってくる。

それは、直接身体に直結した外界（「物的世界」の「快さ」という心地が関心の的になっている。寝心地、着心地、乗り心地、履き心地など、ここに心地は身体と直接むすびついたものにあらわれている、それをみんな快適さと呼んできたのではないかと。

そしてそれはまず、生まれついたりから（生得的に）人間が持ち合わせている、つまり動物たちと同じような快さの感覚をもちあわせているのではないか。それを通常、「生理的快適」といい、人間が後天的に人間独自に獲得する「心理的快適」と区別してきたのではないか。いつの議論もこれら二つの快適が並行・対立状態で扱われてきたのだ、というのである。

建築分野でも、快適性についての研究が、一九八〇年代の後半から九〇年



え・安原喜秀

代の前半にかけて盛んに行われた。九五年には、脳内現象に着目して、生理的快適と心理的後天的な快適を、対立ではなく、一本の軸にまとめた試みもみられた。（瀬尾文彰・坊垣和明「快適性の構造に関する基礎的研究」日本建築学会計画系論文）

それによると、人間のもつあらゆる

による学習無しに、ひとに快さをあたえているのだろうか、というところがそうでもない。

そのように、物的世界から言葉にまで関係するとなると、先にあげた三つの対象は、そう明快に区別はしにくい。

ところで物的世界と言葉の関係だが、ひとは物的世界に対したとき、言葉を持たず居心地のようなものを感じられるだろうか、という疑問が湧いてくる。これには、赤ん坊が登場してもらった方がいい。その赤ん坊は、まだ大人の言葉を持たなくても居心地を主張するベッドがたびたびしていれば泣きやまず、居心地よければやすやすと気持ちよさそうに眠る。寝ていても聴きえない大きな音に驚く。

そこで、いまの疑問には、どうも彼らには言葉が先立たなくても感じられる居心地があるようだ、との答えになる。いやそれは居心地ではなくて、快適

快適が四つのレベルに分けられ、第一のレベルは、落ち着き・安らぎのような安定的な快適であり、ここに生得的な快適の中心がおさまるようだ。

第二は喉が渴いていて切望し得られなかった水のような、「快」の神経回路がまさに刺戟されている状態。

第三はもつとその回路が刺激され、「快」そのものを目的とした「快楽」や「悦楽」の状態で、ひとを芸術の行動にも導くもの。

そして第四は、ひとの肉体も精神も破壊し兼ねない、ドラッグのようなものもつ耽溺の快適である、としているのである。

快適はこんなにも広がっていて、生活のすみずみにまで入りこんでいる。

こうして、物的世界、それも人間をとりにまく環境（物的環境）のものであるところの快適が、このような射程をもつたら、一体「居心地よさ」はどこに位置するのか。